

限界の先に見えてくるものを探し続ける。

競輪界の第一線を走り続ける村上義弘選手。これまでの競技人生とクルマをこよなく愛する素顔に迫ります。



INTERVIEW #01
 競輪選手 村上義弘

「自分はまだ限界を感じていない。力強く言い切るプロ競輪選手、村上義弘氏。村上選手は、現在43歳。競輪の最高峰集団S級に所属し、長年に渡り競輪競技を牽引してきたトップアスリートです。ハードな戦いが繰り返される中、度重なる自身の怪我とも向き合い、そしてまた自分を立て直しチャレンジしていく。勝利の瞬間のためなら、努力を決して惜しまない。彼の背中を追いかける若い選手たちを自らの姿で鼓舞し続ける、まさに競輪界の宝といえます。」

初めて競輪レースを見て感じた 戦う男のかっこよさ

「父親が競輪のファンで幼いころからよく競輪場へ連れていってもらいました。目の前で見る自転車のスピード感や、レース中に体と体をぶつけ合う音の迫力など、勝負に挑む選手の姿に子どもながらに興奮して男らしいなと感じたことを覚えています。」

そう語りながら、子ども時代を懐かしむ村上選手。すでに小学生の頃には、競輪選手になりたいと

思うようになり、外に出ては子ども同士、自転車競争に明け暮れていたといえます。競輪選手になりたいと漠然と思いついていた夢を、自ら動かすはじめたのは中学時代。

「中学時代は何もわからず、ただ長い距離を、がむしゃらに長い時間走っていました。でも、探究心が人一倍旺盛だったので、自転車ですれ違う人を止めて、『その自転車どこで買ったのですか?』とか『試合に出るためにはどうすればいいですか?』など、自分からいろいろと質問してリサーチしていました。」

当時はまだインターネットも普及していない時代。必要な情報を得るためには、図書館へ足を運んだり、知識のある人に話を聞いたりする必要がありました。夢のためなら、自らの足で動き、情報を集める労力を惜しまなかった村上選手。高校進学を決める際にも、当時京都の高校で一番自転車競技のレベルが高く、そこから競輪選手になった人も多いという情報を掴み、名門『花園高校』への進学を決意したのでした。

速いだけでは勝てない。競輪に求められるのは総合力です。

「競輪は、ただ速いだけではない。何か一つが飛び抜けているからといって勝てる競技ではありません。競輪はメンタルも含めた総合力が勝敗を左右します。トレーニングで強い選手はたくさんいますが、レースでは必ずしもそれを発揮できる訳ではない。レース中は互いに駆け引きするのですが、そこに総合力が必要になる。風向きや選手の癖を知り、どう攻めるかの戦術など、さまざまなことを考えなければ。ですから、今でも日々の取り組みとしては、さまざまな角度からレースを捉える総合力を高めていくことを常に意識しています。」

競輪は9人の選手で順位を競う競技ですが、ただ速さのみを



Yoshihiro Murakami

1974年、京都市出身。日本競輪選手会S級S班に所属。
 2002年GI初優勝。2012年KEIRINグランプリ初優勝。2013年・2014年ダービー連覇。
 2016年名古屋ダービー3連覇、KEIRINグランプリ2度目の制覇など。
 競輪界を代表する先行選手で、その走りは「魂の走り」と呼ばれる。

争っているだけではありません。レースの序盤は同じ地区に所属する選手と縦列に並ぶラインを組み、互いの得意なポジションで走行する。そして終盤にそれぞれが勝負を仕掛けていきます。

「選手一人ひとりに個性があります。先頭で風を切るのが得意な選手、横の動きが俊敏な選手、各自が自分のレースを有利に進められるようにラインを組むパートナーとの信頼関係を保って走ります。選手の特徴がレースに色濃く反映されるわけです。」

レースの終盤は、時速おおよそ70kmで走りながら体をぶつけ合い自分のポジションを確保していく。その激しさの中で、選手のさまざまな戦略や攻防が巻き起こり、レースがより一層のライブ感を増していきます。一瞬の判断が勝敗を分ける競技。知れば知るほど奥深く、観客も自然と興奮の渦に巻き込まれていきます。

クルマは心のスイッチを切り替える大切なパートナー。

村上選手は、2台のクルマを所有しています。愛車は『アウディQ5』と『メルセデスベンツS600』。普段の練習に使うのは、自転車何を台も積める

アウディQ5を愛用。レースの移動に使うのは、メルセデスベンツS600だといいます。

「レースの前の移動にはできるだけ体に負担をかけないように、静かで走りの安定しているベンツを使っています。クルマは僕の競技人生の大切なパートナーです。年々ライフスタイルの中でも、その重要性を感じるようになってきました。普段はアウディに乗って、練習モードにスイッチを入れて、レースに向かう際はメルセデスベンツで本番のスイッチをON。クルマを乗り分けることで、自然と心のスイッチを切り替えています。」

レースで乗る自転車の数ミリの誤差を体で感じ取ることができるといふ村上選手。クルマに乗るときの自分のモチベーションや体の感覚というものも普段から重要視しているのではないかと想像できます。

「普段は常に勝負の世界にいますから、いつもどこかで戦闘態勢になっている部分があります。片や、きれいな景色を見ながらクルマで走っていると気持ち良くなって頭の中がすくりにラックスできます。練習でよく丹後半島に行くのは、海沿いを走る爽快感がたまらなく好きだから。これといった目的がなくても、ただクルマで走

応援してくれる人がいる。それが自分の力になっていきます。

「30代後半になって競輪の壁を感じているときに、マツシマホールディングスさんと出会いました。レースを休場しなければならなくなったとき、気持ち切れてしまっ

て、そろそろ『引退』という二文字がチラついていた頃、マツシマさんがスポンサーについてくださりサポートを受けながら走らせてもらうことができました。松島社長からは、あきらめたらアカンとお会いするたびに何度も激励していただいています。そのことに対する責任を果たしたい、頑張る姿を見ていただきたいという思いで、もう一度走り始めました。そこからです。目標としていた日本選手権で優勝をつかみ、昨年は賞金王にも輝くことができました。応援してくれる人がいるということが今の自分の力。だからまだまだ走り続けられます。」

静かに、そして時に熱く語る村上選手。その目は、さらなる高みを目指す輝きに満ちあふれていました。



1.これまで数々の優勝を重ねてきた村上選手。「どんなレースも常に全力で。応援し、支えてくれるすべての人に感謝したい」 2.練習場へ向かうパートナーは、アウディQ5。自転車を何台も積み込める広いラゲージスペースが魅力。 3.レース日の相棒は、メルセデスベンツS600。安定感のある走りが、レースに向かう心を静める。 4.激しい体と体のぶつかりあいで、年中、怪我が絶えない。怪我に屈せず、そこからどう這い上がるかもトップアスリートに課せられた使命。